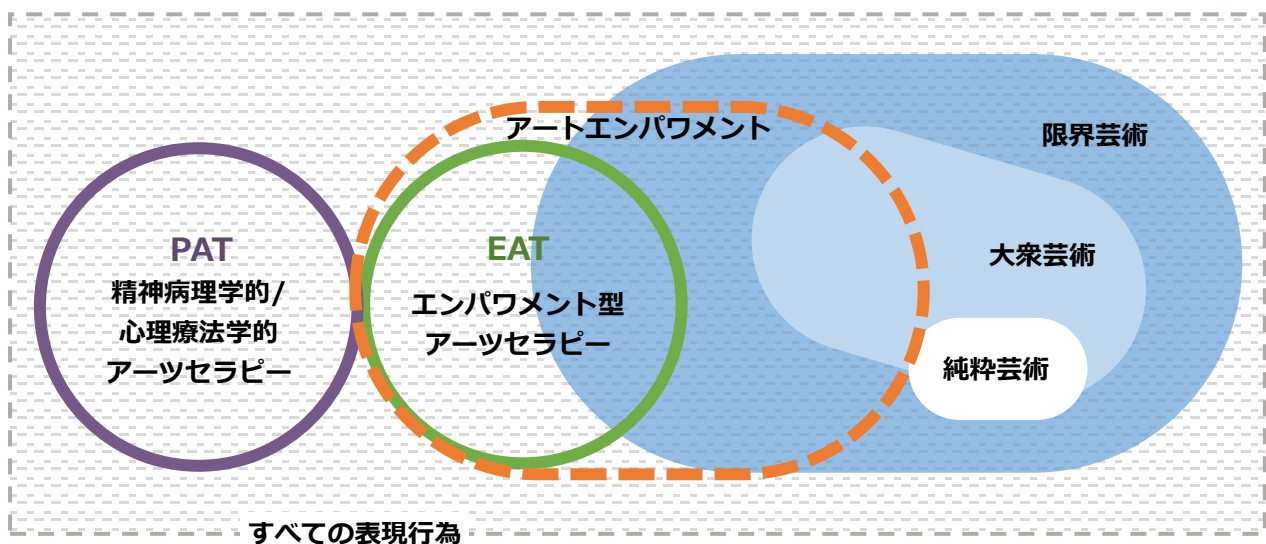


アーツセラピー/エンパワメントの全体的な位置関係

エンパワメント型アーツセラピーや、エンパワメントに関与するアート活動が、それぞれどのような位置関係にあるのかを把握可能にするため、我々はこの関係モデルを考案した。下図は 2017 年モデルを改訂したバージョン（2018 年）である。

各々のセラピストや活動家がどのあたりを歩き来しているのか、このモデルに照らして検討することによって、その活動のエンパワメントとしてのあり方や立場を判断することができる。



【すべての表現行為】

人間の言語活動、行為、表情、所作、着衣、身体装飾などすべてが表現行為であり、そこに境界はない。

【限界芸術】

鶴見が提唱した「限界芸術」(Marginal Art)の概念を応用している。限界芸術とは非専門家によってつくられ、非専門家によって享受されるものであり、アートと生活が浸透し合う広大な領域を形成している。それゆえ図では周縁部が大きく取られている。それは「芸術の最初の形」であり、「純粋芸術・大衆芸術を生む力をもつ」とされる。

【大衆芸術】

専門家と企業によって合作され非専門家＝大衆に享受（消費）されるものである。大衆芸術は享受者をエンパワーする作品の宝庫といえる。

【純粋芸術】

専門家によってつくられ、その分野に精通した専門的享受者によって享受されるものである。「芸術のための芸術」という言葉どおり、人をエンパワーすることは目的や意識には見られない。結果的に、制作者本人あるいは享受者をエンパワーすることはある。

※「限界芸術」「大衆芸術」「純粋芸術」については、鶴見俊輔『限界芸術論』（1991,ちくま学芸文庫(初版1967,勁草書房)）を参照

【アートエンパワメント】

エンパワメント効果のあるアート活動として、地域再生型・活性化型アートプロジェクトから、娯楽・エンターテイメント（大衆芸術）、地域の公民館で行われる絵画や音楽、文芸などのサークル活動までプロ/アマを問わない様々な活動（限界芸術）ともクロスし、またエンパワメント型アーツセラピーが包摂される。この活動領域には、純粋芸術に向かうような、アート作品としての質を追求する活動—典型例がアウトサイダー・アート—もある。そのため、両者の境界を接するように描いている。

【EAT：エンパワメント型アーツセラピー】

アートエンパワメントのなかでも、セラピー性が高いアーツセラピー、すなわち、(1)アートのセラピー機能を意図的に活用していること、(2)臨床的であること、(3)アートに関する技能があること、これら3つの点で際立っている活動を区別している。

【PAT：エンパワメント型アーツセラピー】

治療・寛解を目的とし、計画的にアーツセラピーを活用している領域。「アート」の領域から切り離している理由は、①病理学的アーツセラピーが近代医学の制度と実証主義的科学に則っており、そこでの表現は心理査定や治療を目的としていること、また②その病理的表現にアート（芸術）としての質が認められるのは全体としては極めて少数であり、病理とアートを直結させるほどの一般性は見られないこと、である。

***** 分類、区別は、**境界づけ**や**分断・限定**が目的なのではなく、多種多様なアーツセラピーの混沌とした状況に一定の目安をつけ、適切な理解や評価が可能となるようにすること、また活動家にとっては、自己の立ち位置が認識できるようにすることが目的である。
また、実際の活動内容は横断的で重なるところがある。